

第10079号  
平成22年9月30日

外務省大臣官房会計課長  
梨田 和也 殿

特定非営利活動法人  
ブリッジ エーシア ジャパン  
理事長 根本 悦子

## 日本NGO連携無償資金協力 事業完了報告書

平成21年9月16日付日本NGO連携無償資金協力贈与契約に基づく「ミャンマー連邦エヤワディ管区サイクロン被災村における学校校舎再建事業」が、平成22年7月15日をもって完了いたしましたので、関係書類を添え、下記のとおり報告いたします。

### 記

1. 事業の実施期間： 平成21年9月16日 ～ 22年7月15日
2. 事業の実施成果（要約）：

本事業では、2008年5月の大型サイクロン「ナルギス」で甚大な被害を受けたエヤワディ管区モールミヤインジュン・タウンシップのイエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村、セインパン村の学校で、サイクロン襲来時には避難用シェルターとして使用できる鉄筋コンクリート製の校舎（イエートウインゴン村：2階建て6教室、ミェッタリンゴン村：1階建て4教室、セインパン村：1階建て4教室）、土壌流出を防止する壁（イエートウインゴン村）、井戸（ミェッタリンゴン村、セインパン村）や雨水収集タンク（イエートウインゴン村）、トイレを建設し、フェンスや遊具を設置し、木製の学校家具も供与した。また、各学校での建設作業は、5人の訓練生を対象とした大工や左官のオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)を兼ねて実施された。

その結果、各学校の生徒と教員が、より整備された快適な環境で学び、教えることができるようになり、各学校では、事業開始時よりも多くの生徒が授業を受けられるようになった。また、イエートウインゴン村の新校舎には約600名、ミェッタリンゴン村、セインパン村の新校舎にはそれぞれ約400名を災害時に収容できるようになった。このように、各学校の子どもたちが快適に楽しく過ごせるようになり、災害時にシェルターとして利用できる堅牢な建物ができることにより、サイクロンで被災した生徒や教員、生徒の両親、その他の村人たちの心的外傷や不安感が大幅に和らげられた。さらに、OJTを受けた3村の住民15名が左官や大工の基礎的な知識とスキルを得ることができ、3村で新校舎が建設されたことにより校舎修繕・再建に関する各コミュニティの経済的負担が大きく軽減された。

<計画の妥当性> 本事業の計画は、被災後、各学校で強固な校舎やトイレ、給水施設、フェンス、家具、遊具などが必要とされていたことを鑑みれば、極めて妥当なものであった。

<効率性> また、本事業では、27,169,222円という事業予算で、10か月の間に3村で鉄筋コンクリート製の学校校舎、トイレ、給水施設が建設され、フェンスと遊具が設置され、家具も供与され、1村では土壌流出防止のための壁も建設されたほか、3名の日本人スタッフの人件費やその他の東京本部経費もカバーされ、非常に効率性の高い事業であった。各村では、村人が船着き場から建設現場までの資材

運搬を無償で手伝ったり、建設作業にボランティアとして参加したりし、建設費を節約することもできた。

<有効性> さらに、本事業は、サイクロンで被災した 3 村の学校の生徒たちが快適で安心できる環境で元気に楽しく学べるようになり、生徒を始めとする村人たちの心的外傷や不安感が大幅に緩和され、合計 15 名の村人が OJT を通じて左官や大工の基礎的な知識とスキルを身に付けることができたことから、たいへん効果の高いものであった。

<インパクト> 加えて、本事業では、教育環境の改善により各学校で生徒数と教員数が増加し、非常に多くの村人がボランティアとして事業に参加し、村人の学校に対するオーナーシップが高まり、トイレや給水施設の建設により生徒や教員の衛生意識・衛生状態が向上し、災害時にシェルターとなる校舎が完成したことで村人の防災意識も高まるなど、数多くのインパクトが生み出された。

<自立発展性> また、本事業では、各村で学校建設・メンテナンス委員会が形成され、村人が学校施設の維持管理を行っていく体制が整っていることから、事業の自立発展性も高いといえる。

3. 日本 N G O 連携無償資金精算額 : 2 7 , 1 6 9 , 2 2 2 円  
(契約額 (供与限度額) と同額)

4. 会計報告 (事業資金収支表、資金使用明細書、支払証拠書オリジナル) :  
別紙のとおり

5. 外部監査報告書提出予定日 : 平成 2 2 年 1 1 月 1 5 日

**【添付書類】**

- ①会計報告関係
  - 事業資金収支表 (様式 4 - a)
  - 資金使用明細書 (様式 3 - a)
  - 交換レート一覧表及び証拠書
  - 経費支払証明 (証拠書台紙) (様式 3 - b)
  - 銀行口座残高証明 (または通帳写し)
- ②担当者業務日報
- ③事業の成果 (詳細報告書)
- ④事業内容説明写真

日本 NGO 連携無償資金協力事業

完了報告書

「ミャンマー連邦エヤワディ管区サイクロン被災村における

学校校舎再建事業」

特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン

## 1. 事業の概要

### 1. 1 実施団体

特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン

### 1. 2 事業名称

「ミャンマー連邦エヤワディ管区サイクロン被災村における学校校舎再建事業」

### 1. 3 事業実施地域

ミャンマー連邦エヤワディ管区モールミヤインジュン・タウンシップ  
イェートウインゴン村、ミェッタリンゴン村、セインパン村

### 1. 4 事業実施期間

2009年9月16日～2010年7月15日

### 1. 5 事業コスト

精算額 27,169,222 円（契約額と同額）

### 1. 6 事業の目的

本事業は、エヤワディ管区モールミヤインジュン・タウンシップの、大型サイクロン「ナルギス」によって学校校舎が損壊した村々において、サイクロンや高潮等の自然災害時に強い学校校舎を再建し、子どもたちの教育環境を大幅に改善し、被災後の復興に寄与することを目的としていた。

### 1. 7 事業の背景

2008年5月2日から3日未明にかけて、大型サイクロン「ナルギス」がミャンマーのデルタ地帯の沿岸部を襲い、暴風雨と高潮・洪水により未曾有の被害をもたらした。2008年6月時点の公式発表によれば、被害を受けたタウンシップの総人口735万人（推定）のうち、死者数は84,537名、行方不明者数は53,836名、被災者数は約240万人（Post Nargis Joint Assessment Report, Tripartite Core Group, July 2008）とされている。

2008年5月中旬に当団体が被災地域で実施した初動調査では、数多くの学校で校舎の倒壊や損傷が見られ、6月2日からの新学期に向けて、校舎を早急に修繕・再建する必要性が生じていた。また、2008年6月のミャンマー政府・アセアン・国連機関による合同調査でも、70%の住民が、早急に修繕・再建が必要とされている公共施設として学校を第一に挙げた（次いで、宗教施設、保健医療施設、歩道、

コミュニティ・ホール) (Post Nargis Joint Assessment Report, Tripartite Core Group, July 2008)。

本事業を実施したモールマインジュン・タウンシップでは、全 326 校(小学校、中学校、高校)の校舎のうち、179 の校舎が全壊した(モールマインジュン教育担当行政官から入手したリストによる)。また、暴風で屋根が飛ばされたり、壁が崩れたり、窓やドア、トイレ、給水タンクなどが破損したり、校舎が傾いたりして、大規模な修繕が必要となった学校も多かった。

このような環境では生徒が安心して学習できないことから、サイクロン襲来直後から、国連児童基金(UNICEF)、国際NGOなどの多くの援助機関、個人ドナーや村コミュニティが木や竹と防水シートなどでできた仮設校舎を建設した。しかし、こうした校舎の耐久性は半年～1年ほどと言われ、また日中は校舎内が非常に高温となることもあるので、生徒にとって好ましい学習環境とは言いがたかった。そのため、多くの学校から早急な新校舎の建設や修繕の要請が上がってきたが、被害規模が非常に大きいことから政府機関も十分な対応をしきれていなかった(2009年5月中旬時点の情報によると、5月末の雨季の始まりと6月1日の新学期の開始を前にして、ミャンマー政府はモールマインジュン・タウンシップの損壊した学校のうち102校の再建を行っていく計画を持ち、既に86校の校舎の再建を民間建設会社に委託していたが、完成しているものはほとんどなかった。これらの建設業者は、幅18m×奥行き9mほどの木柱、レンガ壁、トタン屋根の校舎を各学校につき各1棟を建設する予定だった)。また、被災地域の多くの村々では、被災直後であることもあり十分な財力や技術がなく、コミュニティの自助努力で校舎の再建・修繕を行うことはできない状況であった。

本事業の事業地であるモールマインジュン・タウンシップは、政府が指定した7つの被災タウンシップの1つであるが、ヤンゴンからの直通道路がないため、同タウンシップへのアクセスが他のタウンシップと比較して悪く、タウンシップ内の各所へのアクセスが水路に限られている村も多いため、学校再建は困難を伴う事業であった。

そうしたなか、当団体では、被災直後から2009年5月中旬までに、ミャウンミヤタウンシップとモールマインジュン・タウンシップにおいて33校の校舎の再建・修繕を完成させ、UNICEFが2校、セーブ・ザ・チルドレンが8校、ミャンマー赤十字社が15校、政府が102校、その他の個人ドナーが数校の新校舎の建設をモールマインジュン・タウンシップで計画・実施していたが、まだ十分な支援が行き届いているとは到底言えない状況であった。

サイクロンから1年が経過した本事業申請時点(2009年6月)でも、モールマインジュン・タウンシップの数多くの学校では、未だに防水シートの仮設校舎が主な校舎となっていた。雨季の始まりや終わり頃(10月頃)にはサイクロンの再来が懸念され、6月からは新学期を迎えたにもかかわらず未だ生徒にとって好ましい学習環境が整っていないことに頭を抱えるコミュニティも多かった。

## 1.8 事業の対象者

### ●事業実施により裨益した人数(2009年6月時点→2010年7月時点)

	世帯数	人口	生徒数	教員数
イェートウインゴン村	310→315	1,147→1,167	210→246	6→8
ミェッタリンゴン村	139→144	600→576	601→651	15→22
セインパン村	250→242	1,164→1,120	341→474	8→10
合計	699→701	2,911→2,863	1,152→1,371	29→40

## 2. 事業内容

### 2.1 事業の実施体制

本事業は、当団体のモールミヤインジュン事務所を拠点として実施され、ヤンゴン事務所、東京事務局からも必要な後方支援を提供した。本事業においては、ミャンマー駐在代表がプロジェクト・マネージャーを務め、東京事務局の事務局長補佐と総務・経理担当がそれぞれプロジェクト・コーディネーター、会計担当として事業のサポートを行った。

本事業での学校校舎建設については、施工前にモールミヤインジュン・タウンシップの教育行政官との協議・調整を行い、教育省からの許可を得て実施した。

また、コミュニティ・レベルにおいても、当団体は建設前に各村の村人と十分に話し合いを重ね、建設活動に積極的な村人や長老に学校建設委員会を組織してもらい、校舎やトイレ、給水施設の位置、ボランティアやオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)の訓練生の募集などについて協議を行い、完成後の維持管理において学校建設委員会の果たすべき責任について理解を得た上で建設を進めた。

### 2.2 事業の概要

当団体は、モールミヤインジュン・タウンシップのイエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村、セインパン村において、村人との協議に基き、サイクロン襲来時にシェルターとして使用できる鉄筋コンクリート製の校舎とトイレを各村 5 名の村人に大工・左官等の OJT を行いながら建設し、木製の家具（机と椅子のセット）を供与した。また、子どもたちの心のケアのために、校舎前方の敷地の整地作業を行って校庭を造り、うんてい、シーソー、ブランコ、すべり台、バドミントン・コート等の遊具を設置し、生徒の安全のために各学校の前方に鉄製の門の付いたレンガ製のフェンスを設置した。さらに、ミェッタリンゴン村とセインパン村では井戸を、イエートウインゴン村では井戸の代わりに 5,000 ガロンの雨水収集タンクを設置した。加えて、イエートウインゴン村では、校舎後方に土壌の流出を防止する鉄筋コンクリート製の壁も建設した。各村での支援活動の概要は以下の通り。

	イエートウインゴン村	ミェッタリンゴン村	セインパン村
学校名	イエートウインゴン中学校(付属) [Ye Twin Kone Affiliated Middle School]	ミェッタリンゴン高校(準) [Meik Tha Lin Kone Sub-High School] (2009年 11 月に Affiliated High School から昇格)	セインパン中学校(付属) [Sein Pann Affiliated Middle School] (2009年 12 月に Post Primary School から昇格)
生徒の学年	1 年生～9 年生	1 年生～11 年生	1 年生～9 年生
鉄筋コンクリート製の校舎	屋上付き 2 階建て 6 教室(18.3 m× 9.15m× 7.13 m)	1 階建て 4 教室(24.4m× 9.15m×3.66m)	1 階建て 4 教室(24.4m× 9.15m×3.66m)
トイレ	4 ユニット	4 ユニット	4 ユニット
木製学校家具	50 セット+教員用 5 セット	40 セット+教員用 4 セット	40 セット+教員用 4 セット
遊具	うんてい、シーソー、ブランコ、すべり台、バドミントン・コート等	うんてい、シーソー、ブランコ、すべり台、バドミントン・コート等	うんてい、シーソー、ブランコ、すべり台、バドミントン・コート等

レンガ製のフェンス	41.5m(鉄製の門1か所付き)	60m(鉄製の門1か所付き)	90m(鉄製の門3か所付き)
給水施設	雨水収集タンク(5,000 ガロン)	井戸(深さ 200m)	井戸(深さ 60m)
その他	校舎後方の鉄筋コンクリート製の壁(29m)		
建設開始日	2009年10月28日	2010年3月4日	2009年11月5日
建設終了日	2010年5月20日	2010年7月3日	2010年2月8日(校舎等) 2010年7月5日(フェンス)
引渡し式典開催日	2010年5月31日	2010年7月5日	2010年2月20日

建設終了後、各学校で引き渡し式典が開催され、上記の施設が政府の基礎教育局とそれぞれのコミュニティへ引き渡されたが、施設の実質的な維持管理については、各学校の PTA 及び学校委員会が責任を持っている。

### 2.3 村人への OJT

3村での学校校舎等の建設作業は、村人の OJT を兼ねて実施された。各村では、学校建設委員会との協議を通じて、5名の村人が OJT 訓練生として選ばれた。OJT 訓練生の選考基準は、①18歳～40歳であること、②健康であること、③学習意欲があり学校建設作業に強い関心があること、④学校建設作業に最初から参加できること、などだった。

選ばれた訓練生は、OJT に参加する前は、農業や漁業の賃金労働者、大工の見習いなどとして働いており、収入は1日2,000～3,000チャット程度だったが、仕事が毎日あるわけではなかった。OJT 訓練生には、訓練中、最初の約2か月は1日2,000チャット、その後は1日2,500チャットの生活手当が支給された。

OJT 訓練生への指導は、主に当団体のサイト・スーパーバイザーが行い、訓練生は、建設についての基礎知識、建物のレイアウト、基礎工事のための掘削作業、鉄筋の組み方、鉄筋加工、鉄筋コンクリートの柱、左官、大工、セメントの混ぜ方などを学んだ。訓練生は、初めは大工と左官の基礎を中心に学び、数週間後、大工、左官、鉄筋加工のなかで特に興味のある作業を選び、選んだ作業について特に集中的に学んだ。訓練生の多くは左官と鉄筋加工に強い興味を示した。そうした技術は、将来の学校校舎のメンテナンス作業において役立っていくと考えられる。

各村で学校校舎が完成する頃には、OJT 訓練生はある程度の建設技術を身に付け、イエートウインゴン村の訓練生の1人は、「普通の家であれば自分だけで建てられるようになった」と話した。訓練生のなかには、より高い技術を学ぶために、工事完了後、当団体の他の事業実施地で半熟練工としての勤務を希望する者もいた。OJT 訓練生の全てが、将来、学んだスキルを活かしていけると確信しており、建設の仕事が続けたいと考えているが、すぐに建設の仕事は見つからないので、しばらくは以前のように賃金労働をしていく者もいる。

OJT 終了後、就労に役立つよう、訓練生に測量用テープ、工具などが供与された。

### 2.4 専門家による点検・評価作業

本事業開始直前に、日本人の建設技術専門家をモールマインジュン・タウンシップに派遣し、当団体が他事業で建設した鉄筋コンクリート製の学校校舎の点検・評価、技術的なアドバイスを受けた。この専門家は、本事業で学校校舎の建設を予定していたイエートウインゴン村とセインパン村でも調査を行い、助言を提供した。

本事業が開始されてからは、以下の表の通り、ミャンマー人の建設技術専門家がイエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村、セインパン村の建設現場を頻繁に訪問し、点検・評価作業を行った。

	訪問日	訪問地	作業内容
1	2009年10月8日、9日	イエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村、セインパン村	学校を調査し、校舎の建設位置を決定。土壌のチェックなど。
2	2009年11月6日、7日	イエートウインゴン村、セインパン村	建設資材の点検(セメント、鉄筋、砂利、砂などのチェック)。基礎部分の確認など。
3	2009年11月20日、21日	イエートウインゴン村、セインパン村	レンガ積み作業・鉄筋作業・型枠作業・コンクリート作業などをチェック。
4	2009年12月15日、16日	イエートウインゴン村、セインパン村	レンガ積み作業・鉄筋作業・型枠作業・コンクリート作業などをチェック。
5	2010年1月10日、11日	イエートウインゴン村、セインパン村	鉄筋作業・型枠作業・コンクリート作業などのチェック。
6	2010年2月3日、4日	イエートウインゴン村、セインパン村	コンクリート作業・左官作業などのチェック。
7	2010年2月17日、18日	イエートウインゴン村	鉄筋作業・コンクリート作業などのチェック。
8	2010年3月11日、12日	イエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村	基礎部分の確認。鉄筋作業・左官作業などのチェック。
9	2010年4月1日、2日	イエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村	構造物の寸法・コンクリート作業などのチェック。
10	2010年5月15日	イエートウインゴン村、ミェッタリンゴン村	レンガ積み作業・コンクリート作業などをチェック。
11	2010年6月9日、10日	ミェッタリンゴン村	左官作業・屋根作業・天井作業などのチェック。
12	2010年6月29日	ミェッタリンゴン村、セインパン村	塗装作業・フェンス設置作業などのチェック。

## 2.5 村のボランティアの参加

本事業を実施した3村では、村人が自発的に船着き場から学校校舎建設現場まで、砂利、レンガ、鉄筋、セメントなどの建設資材を運搬した。多い時には、50～100人位のボランティアが運搬作業に参加した。また、村人のなかには、建設現場での掘削作業やコンクリート作業などに無償で参加した人もいた。



こうしたことから当団体は建設費を節約することができ、フェンスの設置などの追加工事を行うことができた。それと同時に、村人の建設活動への直接的な参加によって、村人の学校校舎に対するオーナーシップが一層高まった。

## 2.6 その他の活動(防災教育活動)

本事業で支援を行った3村では、他事業の資金によって防災教育活動も実施した。

この防災教育活動は、各村の学校で生徒とPTAメンバーを対象として行われ、2日間のトレーニングが2回ずつ開催された。

### <Part 1>

まず、サイクロン、洪水、津波、地震、火山の噴火、地滑り、火事などの自然災害についてのビデオを見せた。ビデオは、ポスターなどとは比較にならないほど大きな効果があった。

その後、興味を示した約25名の生徒とPTAメンバーが集中トレーニングのために選ばれた。リソース・パーソンは、様々な災害について説明し、エヤワディ管区ではどの災害がどの時期に起こりやすいかを話した。また、災害が起こった時にどのようにして身を守ればよいか、災害にどのように備えればよいかについても説明がなされた。さらに、村の基本的な地図も作成され、学校にいる時にサイクロンが来たらどう行動すればよいかについても指導がなされた。

	イエートウインゴン村	ミェッタリンゴン村	セインパン村
開催日	2009年10月27日、28日	2009年11月28日、29日	2009年10月23日、24日
総参加者数	220	308	502
選抜された参加者の数	27	25	25

### <Part 2>

各村での2回目のトレーニングでは、まず前回のトレーニングに関する生徒の記憶を確かめた。その後、村のなかの探検と地図作り、村の歴史調べを行い、アクセス道路、避難経路、村内の強固な建物などを確認した。また、リスク・ランド・ゲームというテーブル・ゲームを行ったり、気候変動についての追加的な知識を伝えたりもした。さらに、生徒に木の価値や環境と災害の関連を伝えるために、校内で植林作業も行った。そして、最後に、ラジオ、基礎的な医薬品などの入った非常用キットを各学校の教員に手渡した。

イエートウインゴン村では、当団体が本事業で建設した2階建て屋上付きの学校校舎を利用して、サイクロン襲来を想定した避難訓練を2回行い、生徒や教員だけでなく一般の村人も参加した。この避難訓練により、生徒や教員、村人は、サイクロン襲来時に実際にどのように行動すればよいかを理解し、安心感を強めた。

	イエートウインゴン村	ミェッタリンゴン村	セインパン村
開催日	2010年1月10日、11日	2010年2月12日、13日	2010年3月2日、3日
選抜された参加者の数	27	40（教員からの要望により、人数を増やした）	25
サイクロン襲来を想定した避難訓練	2010年5月1日 2010年6月1日		

### 3. 事業終了時の各学校の状況

#### 3.1 イェートウインゴン中学校(付属)

##### ①事業実施に伴う変化

新校舎が完成し、家具が供与されたことにより、教育環境が大幅に改善した。新校舎の教室は換気がよく、光も十分に入り、教室と教室の間に壁があるので授業を行いやすくなった。以前教師だった村長が「こんな教室で教えてみたい」と言うほど快適な環境が整い、教員や生徒は活気に満ちている。村長は、「教育の質や教員のやる気が向上した」と話している。

新校舎の1階の3教室は5年生、6年生の教室、職員室として使用されており、2階の3教室は、7～9年生が使用している。1～4年生は、政府の基礎教育局の建設した校舎や韓国の団体の支援で建てられた校舎で学んでいる。

教員によれば、夕方～22時頃まで、当団体の建設した新校舎で、ろうそくを使ったリーディング・ルームが開かれており、特に8年生、9年生の生徒が夕方以降も学校に来ている。また、週末には、教員を対象とした英語や数学についての研修コースもこの校舎が開かれており、6校の約20名の教員が参加している。

##### <生徒数・教員数の増加>

本事業開始前の生徒数は、2009年6月時点で210人だったが、2010年6月には222人になり、2010年7月には246人(男子117人、女子129人)まで増えた。校長は、「この学校で学びたいという生徒が増えている」と話している。教員数は、本事業開始前は6人だったが、2010年7月までに2人増えて、8人となった。

##### <不安感の緩和>

イェートウインゴン村は、サイクロン「ナルギス」襲来時に3m近い高潮に襲われ、約100人の生徒を含む約300人の村人が亡くなったため、村人は不安感に苛まれていたが、災害時に避難用シェルターとなる2階建て屋上付きの鉄筋コンクリート製の校舎が完成して、村人の不安感が緩和された。特に生徒たちは安心している。

この新校舎の2階部分と屋上には計600人以上が避難することができ、近隣の6か村からもここに避難してくることができる。

本事業で様々な遊具が設置されたことも、生徒たちの不安感を取り除くのに役立っている。子どもたちは、バドミントンや蹴鞠も楽しんでおり、教員は、「このように楽しめる場所はほかにない」と話している。

##### <衛生状態の改善>

本事業で新しいトイレ4つと5,000ガロンの雨水収集タンクができたことで、衛生状態が改善された。雨水収集タンクには十分な水が貯まっており、飲料水として使用されているほか、手洗いやトイレにも使われている。

##### ②施設の維持管理

学校建設委員会は、教員の1人を学校のチェック係にしており、何か問題が生じたら、修理を行っていく。将来必要となると考えられる維持管理作業としては、塗装、ドアや窓の修理、校庭の遊具の修繕、校庭の土盛りなどが挙げられる。

学校建設委員会には、施設の維持管理のための資金はまだないが、何か問題があれば、委員会の

会合を開き、ファンドレイジングを行う予定である。また、学校の敷地内にある水田を農家に貸しており、毎年、収穫時の 11 月頃に 100ドル以上の収入が得られると見込まれている。

### ③今後の計画

本事業で校舎前方に長さ 41.5m のフェンスが設置されたため、学校建設委員会は、11 月頃に始まる乾季に、敷地の側面と背面にもレンガ製のフェンスを建設したいと考えている。

## 3. 2 ミェッタリンゴン高校(準)

### ①事業実施に伴う変化

以前は教室が混雑していて、子どもたちは集中して学ぶことができなかったが、本事業で 4 教室の新校舎が完成し、新しい家具も入って、学習環境が大きく改善された。校長は、「ブリッジ エーシア ジャパンは、一番いい校舎を建ててくれた」と話している。

また、以前は、校舎の不足から、6:30~12:30(中学、高校)、12:30~17:00(小学校)の 2 シフトで授業が行われていたが、新校舎ができて、1 シフトで教えられるようになった。1 シフトに変えたことで、教員たちはより時間的なゆとりを持てるようになり、授業の質も向上した。加えて、以前は、生徒も教員も早朝に家を出なければならず、生徒の両親たちは子どもたちが早朝に通学することを心配していたが、1 シフトになってからそうした心配もなくなった。

#### <生徒数・教員数の増加>

本事業開始前の生徒数は、2009 年 6 月時点で 601 人だったが、2010 年 7 月には 651 人まで増えた。教員数は、本事業開始前は 15 人だったが、2010 年 7 月までに 7 人増えて、22 人となった。そのほか、事務スタッフが 3 人いる。

#### <不安感の緩和>

サイクロン「ナルギス」の際、ミェッタリンゴン村は 1m の高潮に見舞われ、12 人が死亡し、家屋の 9 割が倒壊したため、村人は不安を感じていたが、サイクロン襲来時に避難用シェルターとして利用できる鉄筋コンクリート製の新校舎ができたことで、生徒や教員を含め、村人は安心感を持ち始めた。

この新校舎には、非常時には 400~500 人が避難することができ、ミェッタリンゴンだけでなく、近隣村の住民も利用することができる。

本事業で校庭に各種の遊具が設置されたことも、生徒たちの不安感の緩和に役立っている。子どもたちは、遊具で楽しく遊んでいる。

#### <衛生状態の改善>

本事業で深さ約 200m の井戸とトイレ 4 つが新たに設置されたことで、生徒や教員の衛生状態が改善された。井戸水は、主に手洗いやトイレに使われている。

#### <その他>

本事業が開始された後の 2009 年 11 月に、この学校は、Affiliated High School(付属高校)から、Sub-High School(準高校)に昇格した。

### ②施設の維持管理

この学校には、PTA メンバーが 15 人いる。また、学校建設委員会には 11 人のメンバーがおり、村平

和発展評議会 (VPDC) 議長、教員、長老、PTA メンバーなどが加わっている。

学校建設委員会のメンバーは、「施設の補修が必要になれば何でもする用意がある」と話しており、学校建設委員会には、現時点で約 4 万チャットの貯蓄がある。また、この学校の敷地には 5.7 エーカーの水田があり、そこから毎年 350～400 ドル (30 万チャット以上) 位の収益が得られると考えられている。

### ③今後の計画

この学校では、本事業で校舎前方に長さ 60m のフェンスが設置されたため、レンガの柱と鉄条網で敷地全体を囲う計画がある。費用は、20 万チャット程度と見積もられている。

## 3.3 セインパン中学校 (付属)

### ①事業実施に伴う変化

本事業で 4 教室の新校舎や井戸、トイレができ、家具も供与されて 子どもたちは清潔な環境で学べるようになり、授業や学習の質も改善された。校長は、「子どもたちは幸せ。生徒の両親も喜んでいる」と話している。

新校舎の 4 教室は、本事業終了時は、7 年生 + 4 年生、8 年生 + 5 年生、6 年生 (43 人)、2 年生 (54 人) が使用している。UNICEF が建設してきた新校舎が使用できるようになれば、小学生 (1～5 年生) が UNICEF 校舎に入り、当団体の建設した新校舎は 6 年生～9 年生が使っていく。

#### <生徒数・教員数の増加>

本事業開始前の生徒数は、2009 年 6 月時点で 341 人だったが、2010 年 7 月には 474 人 (男子 266 人、女子 208 人) まで増えた。教員数は、本事業開始前は 8 人だったが、2010 年 7 月までに 2 人増えて、10 人となった。

#### <不安感の緩和>

セインパン村は、サイクロン「ナルギス」襲来時に 1.5m ほどの高潮に襲われ、家屋の 8 割が全壊したため、生徒たちを含め村人は不安感を持っていたが、災害時に避難用シェルターとなる鉄筋コンクリート製の校舎が完成して、そうした不安感が和らげられた。村人は皆、「新しい校舎ができたからもう心配はない」と言っている。

この校舎は、非常時には 400～500 人ほどを収容することができ、近隣の村からも避難してくることができる。

本事業で校庭が整備されて様々な遊具が設置されたことも、生徒たちの不安感を緩和するのに役立っている。また、大人たちも、子どもたちが楽しく遊ぶ姿を見て、心を和ませている。

#### <衛生状態の改善>

本事業で深さ約 60m の井戸とトイレ 4 つが新設されたことで、生徒や教員の衛生状態が改善された。井戸水は、手洗いやトイレ、花の水やりなどに使われている。

#### <その他>

本事業で新校舎建設が開始された後の 2009 年 12 月に、この学校は、Post Primary School から、Affiliated Middle school (付属中学校) に昇格した。

### ②施設の維持管理

この学校の PTA にはメンバーが 15 人おり、学校メンテナンス委員会のメンバーは 5 人いる。

現時点では、学校メンテナンス委員会には維持管理作業を行う資金はないが、学校は 3 エーカーの水田を所有しており、毎年 11 月頃の収穫時に 200 ドル位の収益を得られると見込まれている。そのほか、必要に応じて村人から寄付を募ることも考えられている。

### ③今後の計画

本事業で校舎前方に長さ 90m のフェンスが設置されたため、竹のフェンスを背面と側面に設置する計画があり、既に村人から竹の寄付を集め始めている。

また、校庭に土を盛り、木を植えていくことも検討されている。

さらに、飲み水が不足しているので乾季に 1 万ガロン位の雨水収集タンクを設置する計画もあり、収穫後に寄付を募る予定がある。

## 4. プロジェクトの自己評価

### 4. 1 計画の妥当性

2008 年 5 月のサイクロン「ナルギス」では、非常に数多くの学校校舎が損壊し、被災後にヤンマー政府・アセアン・国連機関が実施した合同調査では、被災地の約 7 割の住民が、早急に修繕・再建が必要とされている公共施設として学校を第一に挙げた。

モールマインジュン・タウンシップでは、全 326 校(小学校、中学校、高校)の校舎のうち、179 の校舎が全壊した。イェトウインゴン村の中学校では、全校舎が全壊し、生徒は耐久性の低い仮設校舎での学習を余儀なくされていた。また、ミェッタリンゴン村の高校とセインパン村の中学校では、3 棟あった校舎のうち 2 棟が全壊し、生徒は辛うじて残った 1 棟と仮設校舎で学んでいた。そして、これらの学校では、サイクロンに耐えられる強固な校舎やトイレ、給水施設、フェンス、家具、遊具などが必要とされていた。

本事業は、こうしたことを背景として、各学校の教育面でのニーズを迅速に満たすために計画されたものであり、被災地で学校校舎の再建を重視するミャンマー政府の方針とも整合性がとれていた。

また、本事業の計画にあたっては、モールマインジュン・タウンシップの教育行政官や他機関と協議・調整がなされ、各学校の生徒数や状況、他機関による支援も十分に考慮されていた。

このように、本事業の計画は、非常に妥当性の高いものであった。

### 4. 2 効率性

本事業では、27,169,222 円という事業予算で、10 か月の間に遠隔地の 3 村で鉄筋コンクリート製の強固な学校校舎、トイレ、給水施設が建設され、フェンスと遊具が設置され、家具も供与され、1 村では土壌流出防止のための壁も建設されたほか、3 名の日本人スタッフの人件費やその他の東京本部経費もカバーされ、非常に効率性の高いものであった。

各村では、村人が船着き場から建設現場までの資材運搬を無償で手伝ったり、建設作業にボランティアとして参加したりし、資材運搬費や建設費を節約でき、必要な追加工事を行うこともできた。

#### 4.3 有効性(目標達成度)

本事業では、イエートウインゴン中学校(付属)、ミェッタリンゴン高校(準)、セインパン中学校(付属)で、災害時に避難用シェルターとして利用できる鉄筋コンクリート製の堅牢な校舎、トイレ、給水施設が建設され、フェンスや遊具が設置され、家具も供与されたことで、教育環境が飛躍的に改善し、サイクロンで被災した学校の生徒たちが快適で安心できる環境で元気に楽しく学べるようになり、生徒を始めとする村人たちの心的外傷や不安感が大幅に緩和され、より多くの児童が学校に通うようになった。

また、本事業では、合計 15 名の村人が OJT を通じて左官や大工の基礎的な知識とスキルを身に付けることができた。

さらに、本事業で 3 村の学校において新校舎やその他の施設が建設されたことにより、学校修繕・再建に関する各コミュニティの経済的負担が大幅に軽減された。

以上のことから、本事業は極めて有効性の高いものであったといえることができる。

#### 4.4 インパクト

本事業では、非常に多くのインパクトが生み出された。

第 1 に、本事業で新校舎建設が開始されて、教育環境の改善が確実になったことから、ミェッタリンゴン村の学校は 2009 年 11 月に Affiliated High School(付属高校)から Sub-High School(準高校)に昇格し、セインパン村の学校は 2009 年 12 月に Post Primary School から、Affiliated Middle school(付属中学校)に昇格した。

第 2 に、イエートウインゴン中学校(付属)、ミェッタリンゴン高校(準)、セインパン中学校(付属)で、教室と教室がきちんと仕切られた新校舎やトイレ、給水施設が建設され、フェンスや遊具が設置され、家具も供与されたことにより、教育環境が大幅に改善され、その結果、各学校で生徒数と教員数が増加した。また、以前 2 シフトで授業を行っていたミェッタリンゴン高校(準)では、より多くの教室ができたことから、1 シフトで授業を行えるようになり、教員が時間的なゆとりを持てるようになって授業の質が向上し、教員も生徒も危険を伴う早朝の通勤・通学をしなくて済むようになった。

第 3 に、イエートウインゴン村では、本事業で建設された新校舎を用いて夕方以降にリーディング・ルームが開かれたり、週末には教員を対象とした英語や数学についての研修コースもこの校舎で開かれたりしており、新校舎は様々な形で利用されている。

第 4 に、各学校の井戸と雨水収集タンクの水は、手洗いやトイレなどに使われ、生徒や教員の衛生意識・衛生状態の改善に結びついている。

第 5 に、本事業では、各村で学校建設・メンテナンス委員会が形成され、非常に多くの村人がボランティアとして事業に参加し、村人の学校に対するオーナーシップが高まった。3 校では、フェンスの延長や雨水収集タンクの設置、植樹など、新たな計画が自発的に立てられている。

第 6 に、3 村で 15 人の村人が大工や左官、鉄筋加工などの基礎的な知識と技術を習得し、それが今後の雇用や学校施設の維持管理などに役立っていくことが期待されている。

第 7 に、災害時に避難用シェルターとなる校舎が完成し、他事業の資金で防災教育活動も実施されたことで、3 村の村人の防災意識が高まり、サイクロンや洪水等の災害により効果的に対処できるようになった。

このように、本事業が対象地域の住民に与えたインパクトはたいへん大きかった。

#### 4.5 自立発展性

当団体は建設前から各村の村人と十分に話し合いを重ね、建設活動に積極的な村人や長老に学校建設委員会を組織してもらい、校舎やトイレ、給水施設の位置、ボランティアやオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)の訓練生の募集などについて協議を行い、完成後の維持管理において学校建設委員会の果たすべき責任について理解を得た上で建設を進めた。また、非常に多くの村人がボランティアやOJT訓練生として事業に直接参加した。そのため、村人の学校に対するオーナーシップが高い。

また、各村の学校建設委員会は、施設の修繕等が必要になれば村人から寄付を募ることを検討しているほか、学校の敷地内にある水田から毎年得られる収入を必要なメンテナンスの費用に充てていくとしており、村人が学校施設の維持管理を行っていく体制が整っている。

さらに、各村では、フェンスの延長や雨水収集タンクの設置、植樹など、今後の新たな計画が自発的に立てられている。

こうしたことから、事業の自立発展性は高いといえることができる。

#### 5. 今後の方針

当団体は、本事業終了後、モールマインジュン・タウンシップに隣接するラブタ・タウンシップで学校再建と防災教育の活動を展開している。

ラブタ・タウンシップはより海に近く、サイクロン「ナルギス」襲来時には高潮の被害が深刻で、避難用シェルターとなるような強固な学校校舎や防災知識の普及が必要とされているが、援助機関による支援や政府機関によるサービスがまだ十分に届いていない学校が数多く残されている。

そのため、当団体はラブタ・タウンシップで、学校再建に防災教育を組み合わせた事業を推進し、他のサイクロン被災地域でもそのような事業を展開する可能性を模索していく。

## 事業内容説明写真



## イエートウインゴン村



イエートウインゴン村の住民とのミーティング



イエートウインゴン中学校の仮設校舎



イエートウインゴン中学校校舎建設地前景



イエートウインゴン中学校校舎基礎梁



イエートウインゴン中学校校舎建設への住民の参加



イエートウインゴン中学校校舎 50%完了時





イエートウインゴン中学校校舎 2階壁面工事



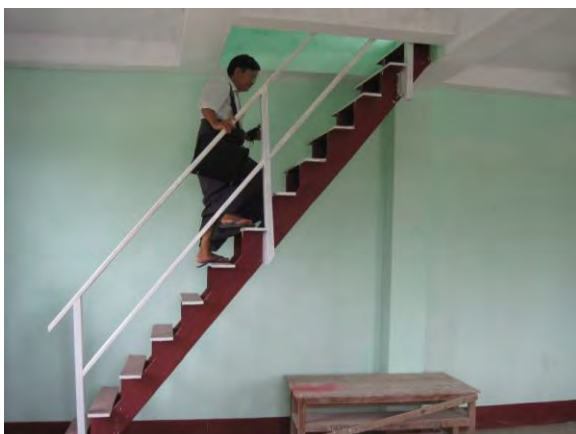
建設中のトイレ



イエートウインゴン中学校で完成した新校舎



鉄製の門の付いたフェンス



校舎 2階から屋上へと続く階段



高潮・洪水の際には校舎の屋上に避難できる



土壌流出を防止する校舎背面の壁



新しい家具の並ぶ教室



イエートウインゴン中学校の雨水収集タンク



イエートウインゴン中学校のトイレ



イエートウインゴン中学校での引き渡し式典



校庭で遊ぶ子どもたち



## ミェッタリンゴン村



サイクロンで全壊したミェッタリンゴン高校校舎



ミェッタリンゴン高校の仮設校舎



ミェッタリンゴン高校の仮設校舎



ミェッタリンゴン高校の仮設校舎



ミェッタリンゴン村の住民との協議



ミェッタリンゴン高校校舎の基礎工事





ミェッタリンゴン高校校舎建設現場(2010年4月)



ミェッタリンゴン高校での引き渡し式典



ミェッタリンゴン高校の校舎(引き渡し式典後)



ミェッタリンゴン高校のトイレ



完成した井戸で手を洗う生徒たち



遊具で遊ぶ子どもたち



## セインパン村



セインパン村の住民との会合



セインパン中学校の仮設校舎



セインパン中学校校舎基礎梁鉄筋作業



セインパン中学校校舎前面作業風景



砂利を運ぶセインパン村の住民



セインパン中学校校舎廊下天井部分作業





セインパン中学校の新校舎 90%建設完了時



セインパン中学校での引き渡し式典



セインパン中学校の新しいトイレ



セインパン中学校に完成した深さ 60m の井戸



セインパン中学校の新しい教室



校庭で遊ぶ子どもたち